

私の人生史～「リボーン洞戸」ができるまで～

船戸崇史

混乱した世相、現代21世紀にあって、人間の原点を訪ねずにはいられない、きな臭く光の
見えない暗雲が世界中を覆っています。世界は我々の集合意識の投影だとしたら・・・。

だからこそ、今回は自分の原点に立ち返り、そんな時代だからこそ私は何者か？私は何がし
たいのか？を「私自身の志を訪ねる振り返り」として今年のもつめにしたいと思います。

そして、それは既に、過日作ってくださった私自身のお絵描き動画に実にうまく纏めてあり
ます。今回はその動画の通信版です。この通信を通して、どうやって私がリボーンしていった
のかをご紹介します。私のリボーンの人生史をご紹介します。



①自分の人生を改めて振り返ると、なんと、幼少時から、既にこうなるようになっていたとしか思えない奇蹟の連続だったのです。

今から思っても、私の人生を通して常に通奏低音として響いている境地があります。それは「かけがえない命」です。それを意識下できたのは、まさに私自身のがん体験でした。しかしもっと昔の幼少時にそれを

を刻印する出来事があったのです。まさに「死にかけた体験」でした。



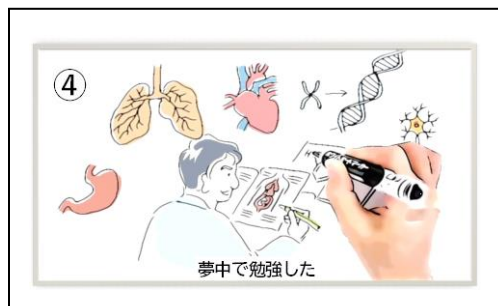
②6歳くらいだったか、大好きな田舎の実家前の川（板取川）で溺れた体験でした。今でもその時の記憶は昨日の如くよく覚えています。私は「死」を覚悟しました。記憶の中では、息苦しさや悲しさなどは全くなく、やけに冷静に事態を感じ、「もうだめや～」と思ったことを覚えています。すると子供なりに、実家と

思う方向を向いて合掌し、「お父ちゃん、お母ちゃん、ありがとう。さようなら」とお別れを言いました。それはとても自然でした。なので、子供だとはいえ、もうダメだと思えば、とっても潔いのではないかと思います。この命（死）に直面した体験はその後の私の人生で常に大事な時には呼び覚まされる感覚だったのです。



③高校生で進路に迷っていた時に、父から「医者はどうや？」と言われました。考えたことはなかったですが、担任に相談しました。「お前の学力では国立医学部は無理やけど、歯学部なら行けるかもな？」と言われました。「歯医者も医者だろ？」と言われた時に、心の中で「違う」と感じました。もっと直接に「命」に関わりたかったのです。思考より先に、No という気

持ちが溢れました。担任には「いや・・・、ちょっと違います。やっぱり医者です」と言いました。すると、「じゃあ、浪人するかまあ、私学なら行けるかもな？・・・ただ、お金かかるぞ」と言われました。父に相談したら、「受けるだけ受けてみやあ」と言われ、3校受けましたが、合格できたのは、愛知医科大学1校だけでした。私なりに精一杯勉強しての結果ですから、そりゃもう嬉しかったです。入れてくれた愛知医大に感謝ですが、親にはもっと感謝です。



④入学後、医学部の勉強はとても面白かったですね。人体が本当にうまくできている事に感動しっぱなしでした。なので、夢中で勉強しました。ある教授から「この知識を知っているかいなかで、目の前の患者さんの生死を分けるのです。あなたたちの知識が人を救うのです。今覚える知識に無駄は一つありません」この言葉は、その後のモチベーションになりました。

私は運動も好きでした。武道が好きで愛知医大では合気道部に籍をおいて、これにも打ち込みました。他にも諸々ありましたが、今から思うと「失敗ほどその後のためになっている」と実感しています。だから、今の学生に声を大にして言いたいことは、何でもチャレンジしてほしい。そしていっぱい失敗してほしい。失敗、失恋、挫折は本当に成長の源ですね。本当に充実した学生生活だったと感謝しています。



⑤試験づくめの大学生活もアツという間に6年生となり、医師国家試験の勉強とともにその先の進路を考える時期になりました。私には、二つの将来像がありました。一つはメスをもって无影灯の下でメスを振るう自分と、もう一つは往診カバンをもって自転車を押している自分でした。ここでも、幼少時の命に直面した記憶がよみがえりました。心拍の音を聞き

ながら、集中して手術をする外科の医者ほど、直接命と直面しているように感じました。



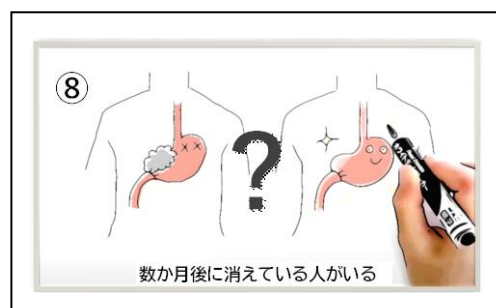
⑥しかし、外科を選んだ本当の理由はブラックジャックへの憧れだけだったかもしれません。カッコよかったからです。大学は地元志向が強かったのもあり、岐阜大学第1外科に入局しました。ここで、また非常に充実した研修医時代を送らせて頂きました。入局後は大学病院での基礎研修だけではなく、当時は余りに給与が安く、そのため1外科の関連病院の当直などよく

でかけました。大学で日中仕事して、終了後に他病院の当直、翌朝大学へ戻って日勤・・・という生活で疲労困憊・・・ですが、他の同期や先輩も全く同様に仕事されており、当たり前でした。

(今の研修医は恵まれていますね)



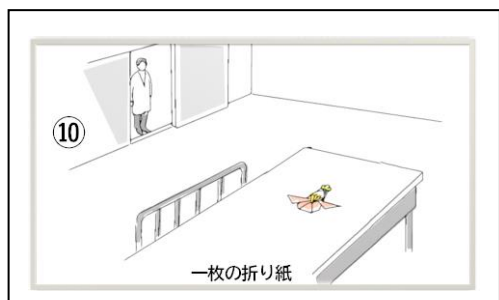
2年後次男、その3年後に長女が誕生し、私は独身男から夫、そして父となりました。特にカミさんは、女医として働きながらの子育てもあり、なかなか(かなり)大変でした。私にもとばかりもありましたが当然でしょう。深夜のモスバーガーはこの頃から習慣になりました。子供が車に乗らないと眠らないので・・・何か車の振動は子守りに良いようです。



⑧それぞれの病院では、本当に沢山の手術をさせて頂きましたが、そんな中でいろいろ不思議な体験もするようになります。一番不思議だったのが、奇麗に取り除いた胃の早期がんが再発したり、がんを術中に取りきれず残したはずが数か月後に完全に消えた事例などです。一体どうなっているんでしょう。しかし考える余裕は与えられず、とにかく多忙でした。私の中では納得が出来ないままでしたが、どうもその人の生き方と関係がありそうだとはいうすず感じていました。しかし不思議はどんどん蓄積していきました。



⑨そんな時、私の中で外科医の人生を大きく変える出来事に出会います。ある日、笑わないAさんが入院されました。スキルス性胃がん。ステージ4。手術は不可。行える治療は抗がん剤だけでした。当時は外科医が抗がん剤治療も行っていました。主治医となった私は、もろもろ手を尽くしましたが、副作用が強くとても辛かった様でAさんの笑顔は見たことはありませんでした。しかし、ある日Aさんが笑っていたのです。それは病棟の看護師がひな祭りのひな人形を患者さんをお願いして折り紙で作るというイベントのお陰でした。Aさんは折り紙が大好きだったのです。



だろう。医療は結局無理やり生かす術なのか？でも最終的に死ぬじゃないか！死なせない医学に必ず訪れる限界。



モニター・・・と徐々に身体は管でぐるぐる巻きとなり、患者さんはいつしか希望と笑顔が消えていきました。「もうだめだ・・・もう帰りたい。でも、こんな状態で帰るのは家族に迷惑。なら先の短い自分がこのまま病院に居ればよい」こうして、「最後は家に帰りたい」というささやかな願いすらも叶えられなかったのです。



た。私のメスではがんに勝てないなら、せめて最期は自宅に帰るお手伝いをしたいと思い、開業する事にしました。35歳でした。



⑩ 3月3日、その折り紙が模造紙に貼られ、廊下に展示される頃には、Aさんは歩く事も食べる事もできませんでした。Aさんはベッドごと、その作品を見に行かれました。そして、その翌日お亡くなりになられたのでした。私は医学として正しかったかもしれない・・・しかし、Aさんを笑顔にできたのは医療ではなく一枚の折り紙。私は一体何をやっているの

⑪ 考えてみれば今まで外科医としてメスで関わらせて頂いた多くのがん患者さんも同じではないか。勿論、手術によって延命される人も多くおられます。しかし、がんが再発し、末期となられた患者さんは再度の元気を求めて病院へ再入院されますが、多くの場合、外科医のメスでは如何ともしがたく、ただ緩和ケアだけで

徐々に悪化する状態に、点滴、鼻の管、尿の管、モニター・・・と徐々に身体は管でぐるぐる巻きとなり、患者さんはいつしか希望と笑顔が消えていきました。「もうだめだ・・・もう帰りたい。でも、こんな状態で帰るのは家族に迷惑。なら先の短い自分がこのまま病院に居ればよい」こうして、「最後は家に帰りたい」というささやかな願いすらも叶えられなかったのです。

⑫ 外科医としてのメスに限界を感じていたその頃

(外科医10年目頃)、母が白血病で倒れました。抗がん剤の効なく6か月後に広範脳出血で亡くなりました。63歳でした。その直前、好きだったメロンを「こんなにおいしいメロンは知らない・・・」と愛おしみながら食べる姿が目に残ります。

⑬ 1994年2月、在宅での看取りを積極的に取り入れたクリニックを縁ある場所で夫婦で開業しました。スローガンは「自分の家で自分らしく生き自分らしく死んで逝ける。それをサポートする医療」でした。つまり在宅医療がやりたくて開業したと言えます。

14しかし、看取りの依頼はありませんでした。開業当初は地元の小児が多く、私は子供は好きですが小児科は苦手でしたので毎日がストレスでした。しかし、開業と同時に開業資金の返済



は始まります。数億を借り入れた場合の損益分岐点は毎日80名の患者さんを診る事であり、診療以外に収入の手立てがない以上、小児であろうが80人をクリアすることに精一杯でした。いつしか、頭の中では数字の計算が始まり、ストレスは募りました。しかし看取りは来ない。新規開業のクリニックに命は預けられない。誤算でした。「こんな事なら開業しなきゃよかった・・・」私はとうとう鬱(うつ)になったのです。しかし外来はある・・・辛く苦しい時でした。



開始された介護保険制度も取り入れて、訪問診察、訪問看護、居宅サービスから通所系(デイサービス、デイケア)、入所系(グループホーム、有料老人ホーム)サービスも展開。収益も増え、経営も順調でしたが・・・激務は当たり前・・・睡眠不足からつい診療中にうとうと・・・そんな日が続きました。



いうフレーズに、自分が苛(さいな)まれました。死ぬのか？



15そんな時、当時メンターと仰いだ先生からの一言で救われます。「あなたの人生はとても順調です。ただあなたの思い通りではないだけです。でも予定通りなのです」・・・何かがコトッと腹におちました。この一言は大きかった。「それならやるっきゃない！」それ以来心機一転。一般往診を増やし、学校保健会や老人会の講師なども積極的に引き受け、2000年から

16ある時、事業の拡張のための新規借入れを期に初めて人間ドックを受けました。すると、何と左腎臓に6cmの腫瘍が見つかりました。左腎臓がん(RCC; Renal Cell Carcinoma)でした。「え？私のがん？それは間違いでしょう。私はそんな柔な人間ではない」と信じる事が出来ませんでした。今まで、散々がん患者に言ってきた、「ほかっておいたら死にますよ・・・」と

17画像を何度も見ましたが、名前も私であり、画像も通常に医師の目で診れば「がん」でした。しかし、間違いかも？と思うと、違って見えもします。当院の泌尿器の医師に「友人の写真ですが・・・」と言って診て貰いました。先生は少しメガネを上げて「ああ、これ腎臓がん、RCCだよ、まあ、オペかな！」瞬時でした。「・・・ああ・・・やっぱりがんですか・・・、実は、こ

れ、私なんです!」「・・・??ええ??」一人称のがんは三人称のがんとは到底比べ物にならないほどの体験でした。ショックでした。



医なら、がんをなめちゃいけないですよ。総戦力で当たるのが当然じゃないですか。切れるだけありがたいですよ。先生の行っている補完代替医療も結構ですから、同時に行われたら良いじゃないですか」こうしてオペを決心したのです。善は急げ、仕事の都合もあり、すぐにとお願いしましたが、3か月待たされました。オペ室が空いてないから・・・と。



事?加温?運動??いやいや関係ない。もう取ったんだから、自由にしていよいよ」と言うものでした。「しかし、自由に生きた結果、がんになったんじゃない?」「だから、関係ないって、がんは事故みたいなもんだよ」、でも私は信じませんでした。原因がないはずがない。私は免疫を上げるための養生と治療を始めたのです。



⑯しかし、そもそもメスに限界を感じて開業したこともあって、私はオペをためらいました。しかし、腎臓がんの治療は、所謂3大療法のうち、放射線や抗がん剤は効きにくく、手術しかありません。しかし決心が付きません。そこで、自分を診察してみたのです。「船戸崇史、男性、48歳、医師、病名は左腎臓がん」という患者を診察しました。私は言います「先生も外科

⑰オペすると決めてからは、とても気分が落ち着き、逆にオペが楽しみにすくなりました。一体今まで私は何人のがん患者さんを手術してきたのだろう・・・まさか自分が受ける側になるとは。まもなくオペ後の痛みに、大きな後悔に変わりますが・・・「こんなに痛いことは二度とごめんだ!生活習慣改めよう!」と。しかし、この時の泌尿器の教授の言葉は意外でした。「食

⑱まず病院の食事では力がでず、お願いして早期に退院。実家の岐阜(関市洞戸)で静養することにしました。ここは本当に大自然に囲まれており(大いなる田舎)毎日きれいな空気をいっぱい吸いながら、散歩、瞑想・・・何より睡眠・・・時間は本当にあっという間に過ぎていきました。こうして1か月の洞戸療養をしました。



㉑ これほどゆっくり寝たことはいつぶりだろう・・・。

こんなに体が疲弊していたとは。医者の不養生とはまさにこのこと。その後に、クリニックで今行っているがんの補完代替治療を一人称で体験できるのは幸運です。高濃度 VC 点滴、リンパ球点滴、温熱療法、還元電子治療、そして漢方専門の妻の漢方薬や食事療法を徹底することにしたのです

そして、退院後の1か月という長期洞戸療養では、一切クリニックのことは連絡しないでね～と言いました。しかしそうは言ったものの、何か言ってくるだろう・・・と思っていました。しかし本当に何も一切連絡がありません。これは逆にショックでした。「え？・・・俺っていなくても良いの？」。自分がいなくっちゃ・・・回らないだろう～と思い込んでいたのは自分だけだったのです。ああ、きつこうして、心身ともにストレスをため込んできたんだな～そう思いました。

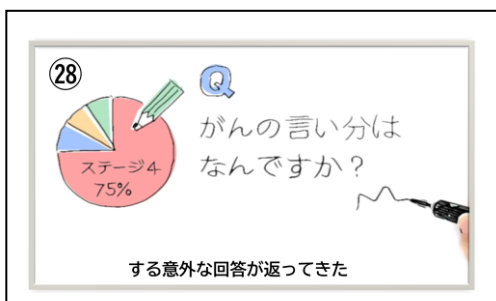
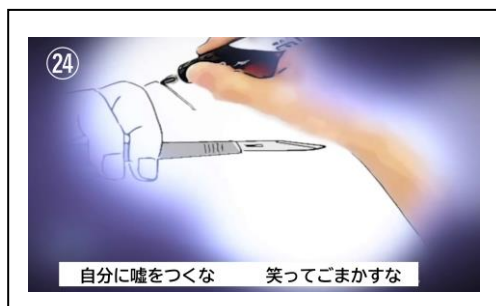


㉒ そして、1か月の療養が終わり、傷もずいぶん癒え、私はめでたく診療に復帰することになりました。しかし、早々異変が起きます。外来で診療が出来なくなってしまったのです。患者さんと話が出来ない。患者さんに大丈夫が言えない。月一回の職員への朝礼でも話せない。全てに自信がなくなってしまったのです・・・。一体何が起こったのか・・・。私は自分自身の内面を振り返ってみました。



㉓ 私には信念がありました。「私はがんにはならない」です。根拠のないものでしたが、どこかで「自分は大丈夫」と思っていたのです。そして分かりました。この同じ心の場所から、外来で患者さんに「大丈夫・・・良いですよ・・・その調子・・・」と話していたのです。しかし、私はがんになりました・・・。「お前の信念とはそんなものだ！」と身をもって見せつけられたのです。

す。根拠のない信念・・・私はそんな浅はかな自分の心で診療していたのです。心のどこかで、治してあげている・・・自分には関係ない・・・自分は医者だ・・・という傲慢さがあったのです。それは無意識的な習慣となって、いつしか信念となっていたのです。



24) そうです。今回のがん体験とは、そんな浅はかで無責任な自分自身と直面した体験だったのです。「大丈夫？ 良いですよ？ そんな事、がんだったお前が言えるのか？」という自問が始まったのです。そう思うと、人と話せなくなってしまったのです。きっとどこかでそれを知っていた・・・でも、私は笑ってごまかし、自分に嘘をつき続けていたのです・・・。

25) 無意識から目覚めろ。今を見て正直に生きろ・・・がんはそう言いたかったのです。だから、登場した・・・これが私のがんの言い分だったのです。

26) 私は、それ以来、常に自分の心をチェックするようになりました。つつい前の癖が出てきます。安易な自分です。簡単に「大丈夫」といって笑ってごまかす癖です。しかし、「本当に大丈夫か？」「それは本当か？それは本気か？」と一つ一つ自分に問いかけては再確認するようにしました。それは地道な作業でした。こうして毎日の診療の中や生活の中で繰り返していったのです。そして気が付くと、少しずつ「うん、大丈夫。これで良い」と言えるようになっていったのです。

27) するとまず睡眠時間が増え、今日中に寝るようになりました。食事が変わり、体を温めるようになり、少しずつストレスが減るにつれ笑顔も増え、体重も標準に近くなっていきました。(今はまたほぼ元通りですが・・・)はからずもこの生き方そのものはがんが嫌がる生活だと言えるのではないかと思います。

そこで、当院へ来られるがん患者さんにアンケートを取ってみる事にしましたのです。

28) がんは偶然、事故のようになるのか？がんはやはり原因や理由があって出てくるのではないのか？世の中に理由や原因のない結果はない。だったら、がんも何かしらの理由があってその結果ではないのか？がんには言い分があるのではないのか？

2014年10月～2015年9月までの1年間で、当院のNON病外来（現在のReborn外来）を受診された124名に「あなたのがんに言い分があるとしたら何で

ですか？」すると意外な回答が返ってきたのです。がんは一言も「死ね」とも「治してみろ」とも

言っていなかった。ただ一言、「変わらなさい」だけだったのです。



②⑨何をどう変えるのか？医学的にがんとは最終的に免疫の病気であり、免疫を削ぐ生き方が細胞をがん化させるという仕組みから、安保徹元新潟大学教授の免疫学を中心に、もろもろのがん関連の本や自分の体験などを参考に「がんにくつ五か条」をまとめました。と言っても、どの項目もあまりに当たり前で「いつでも、どこでも、誰でも、安価に出来る事」で選びました。基準は「平等」です。免疫を上げる方法が「今だけ、これだけ、あなただけ」というのはオカシイ！（なぜか高価）五か条とは①良眠②良食③運動④加温⑤笑いであり、それを習慣化すると免疫力（自然治癒力）が上がる事が分かりました。

逆に、この五か条がおろそかになるとがんが出てくる。重要なことは、ではなぜ疎かになったのか？その心は何か？どこかに私のように間違った信念が必ずあります。その多くは「当たり前」の中にあるので気が付きにくいのです。



③⑩がんを治すのは、医者でも薬でも家族でもありません。がんになったあなた自身なのです。勿論、医師・薬・家族などは重要ですが、サポーターであると認識すべきです。「この薬で治す」とか「この療法で治す」「この人に治してもらおう」は全て間違いだということです。がんは一言も「治してみろ」とも、「死ね」とは言っていない。「今のあなたの生き方を変えなさい」と言っているからです。しかし、なぜ患者さんは焦る

のでしょうか？それは、「がんになったらお終い」だと思い込んでいるからです。これだけ社会で、「死因の1位」だとか「家族ががんで死んだ」となれば当然でしょう。それほど、私たちは「死にたくない」いや、「生きたい」からです。私も体験者だけによく分かります。



③⑪それなのに、助けてもらおうと受診した大病院の権威付きの先生から「まあ、余命3か月かな・・・」とか「後は緩和ケアだね」とか「もうすることないな・・・」などの医者から見れば「正しい」話、でも、生きたい患者さんから見れば「暴言」を言われると、一気に希望が無くなります。失望は免疫力の低下となり結果的に余命が短くならないとも限りません。そもそもがん

患者はまじめな人が多いので、この一言はその後の人生を常に支配すると言っても過言ではありません。特に医師はここは十分注意してほしいところです。「医師である前に人であれ」私の

座右の銘です。「正しい事」には棘があるのです。



③②先にも書きましたが、少なくともがんは「死ね」とは言っていません。「変わりなさい」です。それなら、その人ががんの言い分を聴き、生き方を転換しようと努める事こそががんを本当の意味で治す（治る）事になるのではないのでしょうか。そうです、日本にはがんを悪と決めつけて、消すための（がんに勝つ）場はありますが、がんと向き合い、その言い分を聴こうとする（がんに克つ）場がないのです。

③③それなら、「がんの言い分を聴く場を作りたい」そう思ったのです。がんは悪者の顔して登場しているけれど、実は自分の細胞です。「そこまでしないとあなたが歩みを止めて、人生を振り返り、今の生き方の間違いに気付いてくれないでしょ？」がんはそう言っているのです。本当は、今あるがんセンターの全てで、こうした考え方もあるよ〜と提案するだけで、どれほど多くのがん患者が救われるかと私は思うのです。それが本当のがんセンターではないのか？でも、それが難しなら、作ればいい。

③④こうして、2018年1月23日に私ががんで療養したあの故郷洞戸の里に施設を造ることにしたのです。名称も「リボーン洞戸」。リボーン（Reborn）とは、生まれ変わる事です、今までと全く違う別の自分になるのではなく、「本来で本当の自分の志を甦らせる事」を目指す場を作りたいと願ったのです。きっとそうすれば、がんも消えていくのではないかと？

③⑤具体的には何する場所か？それは、一言で言うなら「がんが治った後にしたいことを探す（思い出す）」ということと分かりやすいかもしれません。がん治療ばかり

りをしてくると、がんを治すことばかりに必死になって、生きる目的を忘れがちです。がん治療は手段です。目的はがんが治って、したいことをするためなのです。私たちはそのために生まれて来たのですから。したいことが本物かを見分ける方法は、「そのために私は生まれてきた」と言ってみてじっくりくるか？いくつでも良いのです。



③⑥ そうです・・出来るとかできないとかじゃなくて、本当にしたい事を探してほしいのです。そのために生まれて来たのですから。それをしていいのです。がんは水戸のご印籠みたいなものです。本当にしたいことを言って、咎められたらこう言うのです。「あの、私がん患者ですけど？何か？」って。無敵なんですよ。私たちはきっと初めからそれをしたくて生まれて来た。でも、

いつの間にか生まれた環境や教育や思想や習慣に埋没し、志を忘れ、目先に翻弄されて無意識的に五か条を削ぐ生活習慣となった。だからがんが「違うよ！生き方変えなさい！」と登場したに過ぎないのです。がんの登場は実は順調だと言えるのです。ただ、あなたの思い通りではないだけです・・。



③⑦ 勿論、リボーン洞戸には、細胞レベルでの免疫力を上げるツールも準備しております。高濃度ビタミン C や α リポ酸点滴、マイルド加温や高加温治療、還元電子や水素ガスを導入しています。また、スピリチュアルな気づきをサポートするためのセラピストも来てもらっています。こうして、肉体細胞レベルやスピリチュアルからもサポートを受けながら、大自然の中で自分で

内観していくのです。私の体験で実証済みの洞戸療養所がリボーン洞戸という訳です。



③⑧ 一番大事なことは、人は最後の最期まで進化する存在だという事です。今までの医学の目的は「長く生きる」でした。それはそれで重要ですが、命を長くしてもいずれ死にます。限界があるのです。それより、いずれ来る最後の時まで、あなたの芯が燃え尽きるまで、如何に光り輝かせるかです。その輝かせ方自体があなたらしさなのです。そうして、最後の最期まであなたらしく生き切るのです。



③⑨ こうして、洞戸の大自然の中に溶け込んでいきます。自然治癒力とは自然に治る力であると同時に大自然が治す力でもあるのです。ぜひがんからの呼びかけを今聞こうとしているあなた、リボーン洞戸へおいでくださいね。数日のステイで、きっとあなたは、自分ががんであったことすら忘れるほどの体験をされると思いますよ。

味は食べないと分かりませんから。リボーン洞戸はホスピスではありませんが、おもてなしの心でスタッフ一同がお待ちしております。あなたのがんの言い分を聴き、本来で本当の自分に甦る場所へようこそ。

きっとこうした個人個人のリボーンが集合意識となり、混乱と暗雲の世界を内界、外界とも

晴らしていつてくれる、最高で確実な取り組みであると信じています。



40以上をお読み頂き有難うございました。これを動画（お絵描き動画）で観ると実にたった11分なんです。汗。でも、いつも私自身もこれを見て励まされ、原点を思い出すようにしております。宜しかったら、皆様も是非一度ご覧下さいませね。

お絵描き動画は、YouTubeで「リボーン洞戸」と入力するか、GoogleかYahooの検索

エンジンで「リボーン洞戸」入力すると、そのトップページに出てまいります。そして、より深くがんの出来る仕組みや治る仕組み、自然に消えていく仕組みなどを知りたい方は「がんが消えていく生き方」を、在宅末期医療から見えてきた生き切り方をつづった「死が教えてくれた幸せの本質」を是非お読みください。ただし、がん患者さんには「幸せの本質」は少々きつ

いかもしれないので、ご注意ください。ね。

41この動画は樟宮さんがつくってくれました。かなり時間をかけて、しっかりインテイクしてから、あなたの人生を10分で表現してくれますよ！卓越した才能です。皆様、良いお年を！！



リボーン洞戸とは？

- ①一言でいうとどんな施設？⇒**がん予防滞在型リトリート**です。
3つの予防(**初発予防、再発予防、進行予防**)を目的としています。
特に、末期など治療法に苦慮されている方もご利用いただけます。
- ②対象は？⇒**がんに関心のある方ならどなたでも**ご利用いただけます。
- ③がん治療中の利用？⇒**主治医の外出・外泊許可**があれば大丈夫です。
- ④利用者数？⇒12室、**14人まで**(ツインが2室)できるだけ、**お一人で！**
- ⑤利用条件⇒**身の回りの事をご自身でできること**が条件となります。
(当施設はホスピスではありません。自費診療所＋療養施設です)
- ⑥ステイの申込みは？⇒必ず事前に**「リボーン外来」**を受診ください。
- ⑦ステイ期間は？⇒お試しは4泊5日が基準。治療は1～2週間。
- ⑧アクセスは？⇒**JR岐阜駅までお迎え**に上がります(要予約)
- ⑨目指すリボーンとは？⇒**本来で本当の自分に甦る。「志」を思い出す。**
電話予約 ⇒ **0581-58-2311 (池田) 岐阜県関市洞戸大野939**